

宗教改革がキリスト教史において大きな転換点になったことは言を俟たない。このキリスト教史上最大とも言える反ローマ教会運動が、ライシテとの関連で話題にされることは少ない。というもライシテの起源をフランス革命に求める場合が多いからだ。しかし、革命期を生きた政治家でもあり思想家でもあるルイ・ド＝ボナルドは、その革命の思想的発露は宗教改革にまで遡ると考えたようである。カルヴァンの後継者であるテオドール・ド＝ペーズが考えたような、市民が君主を排除できるという思想が、彼にとってはフランス革命の遠因に見えたようだ⁽¹⁾。

カトリックとプロテスタントの紛争が、フランス王国も揺るがしたことは周知の事実であろう。とはいえ、当初は王国内に人文主義への理解者も多く、ルターの異説と呼ばれるに過ぎなかった思想への攻撃は少なかった。聖書の熟読を推奨したことから、山間部よりも都市部の知識人の間に広まり、町の宗教と言われた。フランス中央山塊の南東部にあたるセヴェヌ地方に代表されるようにおもに南仏で受け入れられ、1560年代には当時のフランスの人口の10%にあたる200万人の信者が、1,500から2,000ほどあったというプロテスタントのコミュニティで生活していたという。

ルターの95カ条の論議からほどない1521年、パリ近郊にあるモーという町では、ルターの考えに共感し教会の内部からの変革の必要性を感じていたブリソネ司教のもと、ジャック＝ルフェーヴル・デタブルにより「モーのグループ (Cénacle de Meaux)」(1521～1525)という結社が誕生する。このデタブルはフランソワ1世が王子の教育をゆだねたほどの司教だが、初めて聖書をフランス語に翻訳した人物でもある。このグループには、後にジュネーヴに亡命しその地にカルヴァンと呼び寄せ、晩年までスイスのヌーシャテルでプロテスタントの巨頭として活躍するギヨーム・ファレルも参画していた。皮肉なことに内からの改革を願うカトリック司教たちの試みは、フランス国内におけるルター的思想の流布に一役買う結果となった。

しかし、1533年、カルヴァンも起草に関わったパリ大学学長の親ルター的演説が物議を醸し、時の王フランソワ1世もその勢いを嫌って、ソルボンヌ派らの旧教徒に接近するようになる。そんな中、1534年に檄文事件 (Affaire des placards) が起こる。パリをはじめ多くの町でカトリックを弾劾する檄文が貼り出されたばかりか、こともあろうかプロワ城の王の居室の扉にまでその貼り紙が掲げられたという。この事件を機にフランソワ1世は、人文主義的、あるいはルター的な改革思想に厳しい態度で臨むようになった。

次のアンリ2世は父王をしのぐ弾圧を新教徒に加え、「火刑裁判所 (Chambre ardente)」を設置し異端思想を激しく攻撃した。槍試合で負った深手によりアンリ2世が死亡してからは、長男フランソワ2世、続く幼いシャルル9世を摂政として支えた王太后カトリーヌ・ド＝メディシス、カトリック強硬派を率いる有力貴族ギーズ公爵家、ヴァロア家断絶後は王位継承の権利が発生するプロテスタント貴族ブルボン家らの複雑な利害関係が絡み合い、激しい政争が繰り広げられた。

そして、1562年ギーズ公フランソワの家臣がヴァシーの町でプロテスタント信者を殺害した、ヴァシーの虐殺が起こる。これにより1598年まで続くフランス宗教戦争、ユグノー戦争が幕を開けた。大きく8つの戦いがあったとされ、血で血を洗う惨劇が繰り返されたが、1572年のサンバルテルミの虐殺で両派の緊張が頂点に達した。これは新教のナヴァラ公アンリ(後のアンリ4世)と王シャルル9世の妹マルグリットの結婚式に際して、祝宴のためパリに集まった新教徒をカトリック側が虐殺した事件で、新教側指揮官のコリニー提督は暗殺され、多くのプロテスタントが犠牲となった。ナヴァラ公アンリもカトリックへの改宗を迫られ、しぶしぶ受諾させられている(のちに再度プロテスタントへ改宗)。

1576年以降旧教側はカトリック同盟 (Ligue) を結成し勢力を拡大、ギーズ公はアンリ3世を脅かすほど強大化するが、それが故に王に殺される(1588年)。ところが新教側に近づいた王もまた、1589年リーグ同盟員でドミニコ会士のジャック・クレモンによって暗殺された。その後王位に就いたアンリ4世が、和平の礎となるナントの勅令を發布したのが1598年で、ここによりやくユグノー戦争が終結を見ることになった。その間、プロテスタントは1570年に初めて安全居留地 (Places de sûreté) として、ラ・ロシェル、コニャック、ラ・シャリテ・シュル・ロワール、モントーバン の4都市を与えられた。以後ナントの勅令の時点で居留地は51を数え、守備隊駐屯も許可された⁽²⁾⁽³⁾。

しかしながら、フランスの保守的な町はプロテスタント出身のアンリ4世をなかなか受け入れなかったと言われている。実際、アンリ4世は狂信的カトリック信者によって、先代の王と同様暗殺の憂き目にあった。ナントの勅令にしても、法的には信教の自由が認められ、プロテスタントであってもあらゆる職に就くことを許されたが、現実はそのようにはならなかった。8年と定められた安全居留地保証権も、1615年を最後に更新されなくなる。1637年、アランソンでの総会において新教側は、87の村で儀礼を禁止され、多くの信者が公職から追放され、子供たちは自動的にカトリック信者として登録されていると、ルイ13世に窮状を訴えかけている⁽⁴⁾。

こういう国民の全体感情を汲んでか、その後もフランスの「きわめてキリスト教的な王たち (Rois très chrétiens)」は伝統を守り、カトリックを擁護していく。

カトリック教会もまた、トリエントの公会議 (1545～1563) を開いて教会の刷新を図り、イエズス会を先鋒にプロテスタントの影響を押さえにかかっていた。カトリック宗教改革と呼ばれる運動である。

こうしてフランス王家とカトリックは、プロテスタントという共通の敵に対し共闘していくのだが、17世紀以降、フランスは独自の路線を模索し始めることになる。

[註]

- (1) 古城毅『社会統合と宗教的なもの』白水社、2011年、33頁。
- (2) De Turckheim Geoffroy, *Le protestantisme*, Eyrolles, Mayenne, 2011, 33～44.
- (3) <http://www.museeprotestant.org/parcours/>
- (4) Ibid, De Turckheim Geoffroy, 45.